

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 80

学校名・団体名	学校法人帝塚山学院 帝塚山学院中学校
HPアドレス	http://www.tezukayama.ac.jp/cyu_kou/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	総合的な学習における学力の三要素の育成
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>インプットさせることが中心だった、これまでの中学校や高等学校の教育から脱却し、アウトプットする機会をより頻繁に設け、発信力の育成を重視する教育が、21世紀を担う子どもたちにとって不可欠である。アウトプットする努力の過程で、知識がつながれ、補われ、新たな価値・思考が生まれ出される。アウトプットするためには、外化する対象としての他者が必要であり、それを可能にするのが協働学習である。協働学習においてPDCAサイクルを何度も繰り返す試行錯誤があつてこそ、発信力の育成が可能になる。アウトプットを可視化し、協働作業で試行錯誤を促すツールを活用しながら、アウトプットの頻度を上げ、PDCAサイクルを繰り返すことで、生徒たちの発信力の向上を図る。</p>	

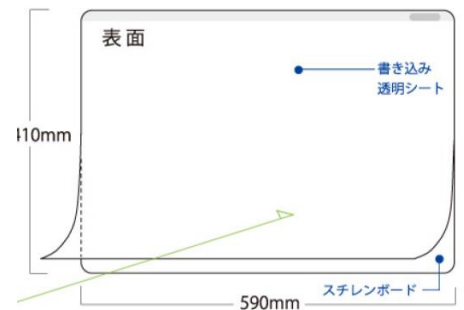
<活動・研究報告>

帝塚山学院は2016年に創立100周年を迎え、帝塚山学院中学校高等学校は女子校として創立90年となった。その6年前、2010年度の新コース制の設置を機に、「時代を創る女性（ひと）づくり」を基本理念とし、その理念の基で、豊かでしなやかやかな感性・構造化する思考力・柔軟で独自の発想力・高い創造力と自己表現力を持つ、時代を創る女性の育成を掲げた。具体的な教育課程上の取り組みのひとつとして、「総合的な学習」の充実を図った。

中学校の「総合的な学習」では、見つける力・調べる力・まとめる力・発表する力の育成のために、その基礎となる14のスキルを身につける詳細な課程を創設した。そのスキルをさらに発展して、より深い学びを実現するために、高校では9つの学問系統から進路を意識した講座を選択し、視野を広げる「創研講座」を設置している。インプットさせることが中心だった、これまでの中学校や高等学校の教育から脱却し、アウトプットする機会をより頻繁に設け、発信力の育成を重視する教育が、21世紀を担う子どもたちにとって不可欠だと考えている。協働学習の中で、失敗を恐れずに自分の考えを発信する力が育まれ、集団で考えをまとめるPDCAサイクルを何度も経験し、グループとしての成果物を洗練させていく過程を通して、生徒たちは個々に学びを深めていくことができる。

学力の3つの要素（知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性）が満遍なく高められるには、アウトプットする努力の過程が不可欠である。その中でこそ、知識・技能が定着・強化され、思考力・判断力・表現力が育成される。自分の考えを他者に表現する協働作業を通して、自ら学ぶ主体性が刺激され、他者の意見に耳を傾ける多様性が意識され、グループとしての成果物をつくり上げる協働性が育まれる。

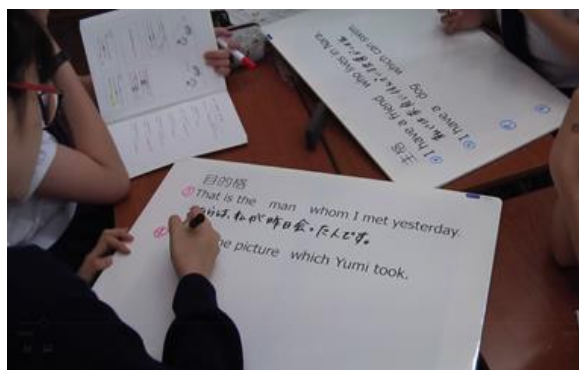
2017年4月から、約B3サイズの軽量ホワイトボードに透明フィルムを被せた「まなボード」（右図）と呼ばれるツールを積極的に活用し、アウトプットと協働作業をより積極的に行う授業改善に取り組んでいる。当初、「総合的な学習」の時間（全学年週1回・2時間）のみでの使用を考えていたが、一般の教科における活用が自然と進んでいった。「総合的な学習」でも活用されているが、やはりインプットがあってこそそのアウトプットであり、毎回の授業で、協働作業とアウトプットの時間を長く取るわけではない。その意味では、一般の授業での活用が加わり、生徒たちの協働学習とアウトプットに関わる時間が増え、より効果的な活用となった。

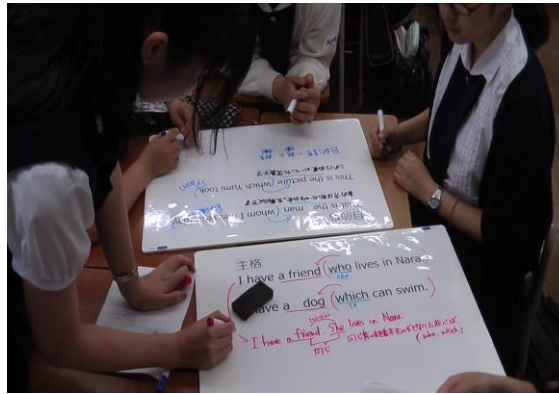


総合的な学習か一般の授業かを問わず、基本的な授業の流れと「まなボード」の活用は以下のようなものである。これらの流れを2回から3回の授業で行うことが多い。

- (1) 講義または演習を通して、新しい単元を教授する。
- (2) 学んだ（インプットした）内容について、その理解を深めるために、または新たな側面からの視点を養うための発問や課題を与える。
- (3) 与えられた課題にグループで取り組む時間を与える。
(生徒たちはグループの考えを発表できるように、「まなボード」に書き込みを行う)
- (4) グループごとに全体に発表する時間を持つ。
- (5) グループの発表が終わった後に、授業者が講評や授業のまとめを行う。

例えば、英語の授業で新しい文法事項を扱い、その文法事項が平均的な中学生にとって理解が難しいもの（「現在完了」の3つの意味、「to不定詞」の3つの用法など）である場合、一度講義をして問題演習を延々と繰り返してもなかなか理解・定着が進まないことが多い。そのような場合に、問題演習の時間を減らすか、または家庭学習に振り分け、授業では「まなボード」を使って、「隣のクラスに今日習った文法を教えに行こう！」という設定で、学んだ内容をグループでまとめ、発表する。

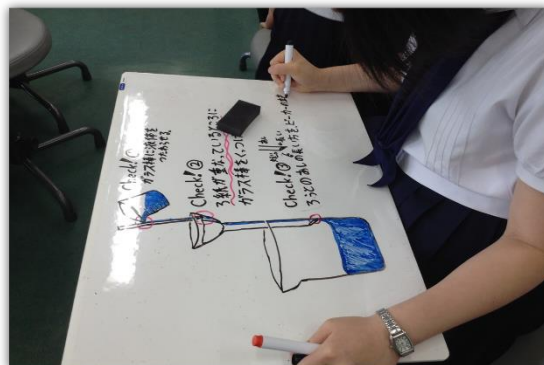




その過程で、協働作業から、各自の理解度が認識され、教えあいが生じ、知識の定着が起こる。問題演習に取り組むよりも生徒たちは生き生きと活動し、発表する（人に教える）難しさを体験し、学びの中に他者の存在を認識する。協働作業とアウトプットがあることによって、（分っていないと発表できないという思いから）問題演習に取り組む姿勢もより積極的になっている。

理科の授業でも、実験の後の授業で、実験を通して学んだ内容をグループで復習し、発展的な課題に答える協働作業と発表を通して、より学びが深くなっている。

また、中学生には難しい「大学入試センター試験」の問題を取り上げ、「どんな方法でもいいから答えを出そう。その過程と解答を発表しよう」という方法で「まなボード」を活用する授業もある。生徒たちは、問題に出てくる実験を実際にやってみたり、参考書を調べたり、普段の教科書からヒントを探したりしながら、自分たちなりの解答を「まなボード」に書き込み、全員の前で発表する。



このような、協働作業とアウトプットを組み込んだ授業では、「知識・技能」に加え、「思考力・判断力・表現力」を養い、協働作業を通して「主体性・多様性・協働性」を生徒たちは発達させている。

現在、試行的であるが、中学校の一部のクラス対象に「中学総合学力調査（ベネッセコーポレーション）」を年1回実施している。その結果、「表現力」の数値が全教科において比較的高く出ている。今後、「学力の三要素」および「アクティブラーニング」の視点から、授業をより充実させ、計画的に「まなボード」を活用し、全クラスで「中学総合学力調査」を受験するなどして、客観的な成果の検証を今後も進めていきたい。